

# 消費構造における地域と年度の研究

## — 食料費 —

加藤 恵子

### A Study on the Region and Age in Structure of Consumption

#### — Food —

KEIKO KATO

#### はじめに

前報では家計調査の全般にわたって、報告をおこなったが、今回は食料費について、費目別、地域別、年度別に考察をおこない、その違いを若干みいだしたのでここに報告する。

#### 調査方法

総理府家計調査年報の48年から54年の7カ年間の資料を主として用いた。

日本を北から札幌、仙台、新潟、東京、名古屋、大阪、広島、高知、鹿児島、那覇の10地域を対象とした。

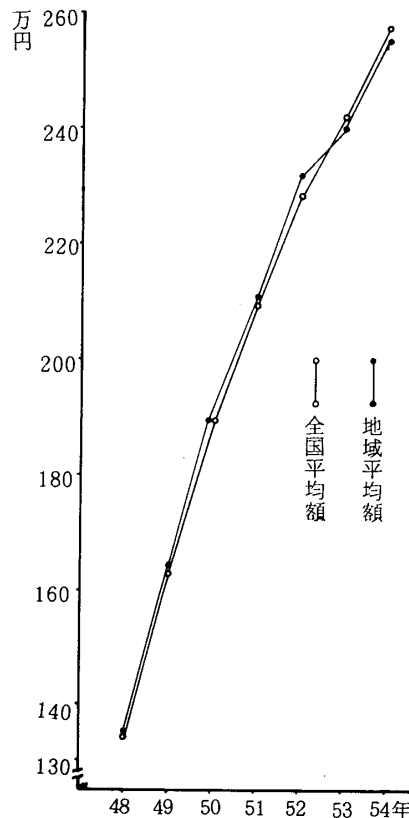


図1 全国、地域別、年度別年間消費支出額の推移

#### 結果および考察

##### I 全国平均と10地域平均の年間平均支出金額について

##### 1) 消費支出額の比較

図1に示したように、消費支出を全国平均（以下全国と称す）と10地域（以下地域と称す）の平均額の差を年度別にみると48年5,600円、49年13,000円、50年2,400円、51年12,000円と全国より地域の方が高い。しかし53年は15,000円、54年23,000円と全国の方が高く、逆転し、しかもその差の開きが大きい。48年から51年は全国、地域ともに前年度との差は年間約20～30万円の伸びをしめているが、52年から54年にかけてはその差も縮小し、約10～15万円と短縮している。52年以降は全国、地域ともに消費支出額は伸びが鈍化の傾向を示してをり、地域いわゆる10地域では全国に比べ生活の厳しさが年

ごとに増していると推察される。

2) 全国，地域別，費目別，年度別年間支出額の推移

(イ) 主食について

食料費のうち主食，副食，菓子，果物，酒類，飲料，外食の7品目に分けて図2に表示する。

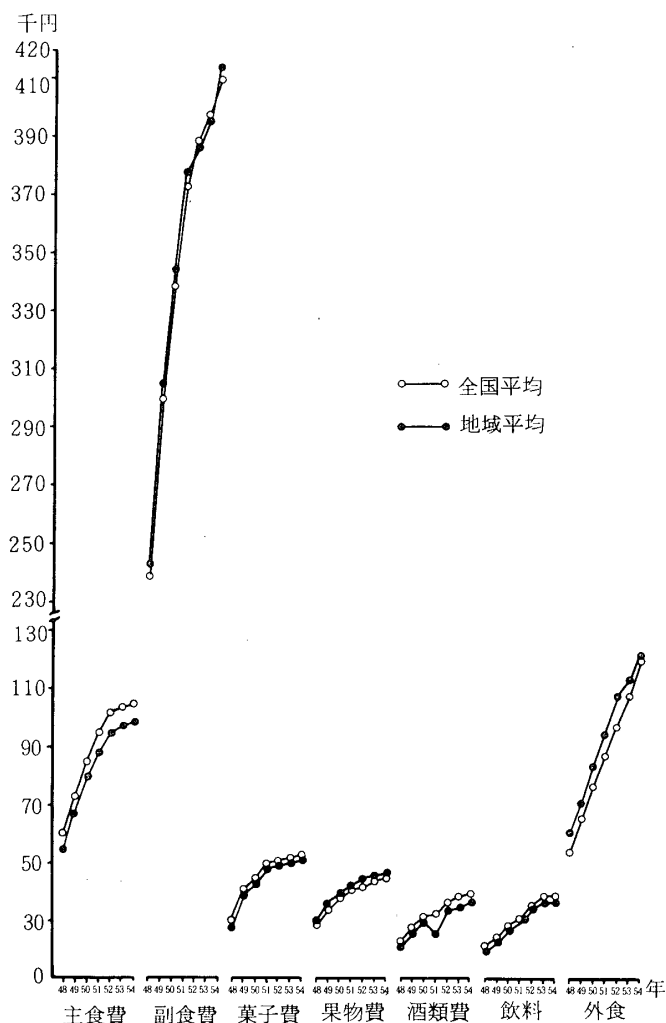


図2 全国，地域別，年度別年間支出額の推移

主食はうるち米，もち米，もち，それに伴う加工賃を含んでいる。支出額は各年とも全国の方が地域より高い。これについて前年度との支出額の差をみると，全国では49年13,000円，50年12,000円，51年9,500円，52年7,200円，53年2,400円，54年400円の伸びを示している。また地域では49年12,000円，50年12,000円，51年6,400円，52年7,700円，53年1,500円，54年1,600円と伸びを示しているが，この支払額をみると，年を追うごとに減少している。

表1に示したように，48年を100としてその推移をみると，全国，地域ともに対前年度との差は52年をさかいに極端に減少してをり，主食は必要財であるといわれているが52年以降変化してきている。

(ロ) 副食について

副食は生鮮魚介類，塩干魚介類，肉類，乳卵類，野菜，加工食品（豆製品，こんにゃく，魚肉製品，つくだ煮，漬物，調理食品），調味料で130余品目に分かれている。

前年度との支出額の差をみると，全国では49年61,000円，50年39,000円，51年34,000円，52年16,000円，53年9,000円，54年11,000円，地域では49年62,000円，50年39,000円，51年34,000円，52年10,000円，53年8,400円，54年17,000円と全国，地域ともに同傾向を示しているが，52年と53年は全国がやや上まわってをり，54年には小幅ながら前年度よりいずれも伸びが目立つ。

(ハ) 菓子について

和生菓子，洋生菓子，ビスケット類，あめ，せんべいなど18品目である。

伸び率から全国，地域ともに前半を48年から51年，後半を51年から54年に分けることがで

きる。前半は約 20,000 円の伸びを示し、後半では約 3,000 円の伸びで鈍化している。

(ニ) 果物について

柑橘類などの15品目で、52年をさかいに、全国、地域ともにやや伸びが鈍化している。

(ホ) 酒類について

清酒、焼酎、ビール、ウイスキー、その他の10品目である。

地域の51年と49年はほぼ同額を示した。48年から50年は全国と地域の差は全国が約1,000円上まわっているが、52年以降地域と全国の差は3,000円の開きが見られる。

(ヘ) 飲料について

緑茶、紅茶、コーヒー、乳酸飲料、アイスクリームなど9品目である。

48年から50年までは全国、地域の差は約800円で51年はわずかに約400円である。52年以降は約2,000円全国が高いが53年以降支出の伸びはみられない。

(ト) 外食について

めん類、洋食、喫茶、飲酒代、学校給食費など11品目である。

いずれも全国より地域の方が支出金額は多く、全国、地域の差は53年までは平均6,600円であるが54年はその差も約1,000円で地域の消費の鈍化がみられる。

I の結果をまとめると

- 1) 主食は必要的支出を骨子としているが、52年から支出額の鈍化は現われてをり、品目の選択、たとえば米類の購入をめん類に移行するなど支出額の縮小や外食への利用など質の変化が起っているものと思われる。
- 2) 副食は季節、気候の変化などにより、一時的に高騰する場合代替することによって支出を調節することの可能な食品が多く、必需的食品でありながら選択性の高い要素を含んでおり、支出の調節をしているものと思われる。
- 3) 全国より地域の消費額が上まわっているのは、果物と副食と外食である。果物と副食は健康的な生活を考慮した場合大切な要素であり、また外食は地域に多くの外食産業が進展していることなどから、利用の機会も多く、全国より支出額が高いものと思われる。
- 4) 支出の伸びの鈍化は、費目により調節する年度に差がみられ、しかも全国、地域ともに同傾向を示している。
- 5) 菓子類や飲料に含まれる砂糖は、近年弊害が叫ばれてをり、買い控えなどで51年をさかいに伸びの鈍化が著しい。
- 6) 外食は表2のように48年を100とした場合の支出の伸びは2倍以上を示しており、食生活の外部への依存が高まっているが、その伸びもややかげりがみえてきている

表2 54年の支出の伸び率 48=100

	消費支出	外食
全国	191	224
地域	189	200

II 10地域における、地域別、年度別比較

1) 地域別、年度別食料費が消費支出に占める割合

前報で53年までは明示したが、54年を加えて図3に示した。53年以降は那覇を除き、下降した。大阪、高知、鹿児島は前年に比べ約1.4%下降している。エンゲル係数の最も高いのは大阪である。全平均値は33.4%である。

表1 主食における全国・地域の推移

年	全 国 平 均		地 域 平 均	
		前年度との差		前年度との差
48	100		100	
49	121.5	21.5	122.3	22.3
50	141.9	20.4	145.1	22.8
51	157.8	15.9	158.6	13.5
52	169.8	12.0	172.4	13.8
53	173.9	4.1	175.1	2.7
54	164.6	0.7	178.1	3.0

F検定の結果表3のように、地域、年度ともに高度に有意差が認められた。

表3 エンゲル係数

要因	S. S.	d. f.	m. s.	Fo	F (0.05)	F (0.01)
地域	186.38	9	20.71	27.99**	2.04	2.72
年度	82.67	6	13.78	18.62**	2.25	3.12
誤差	39.95	54	0.74			
計	309.00	69				

2) 地域別、年度別主食が食料費にしめる割合

地域、年度により支出額が異なるので  $\frac{\text{費目}}{\text{食料費}} \times 100$  で算出し、図示した。

図4に示したように、最も顕著に現われているのは、那覇である。

48年は最低の7.6%で52年には9.6%をしめ、その後横ばいを続けている。48年を100とした場合54年の指数は125で約3割の増加したことを意味し、他県に比べその伸びはきわめて大きい。

沖縄県は小売米価に対し政府で補助をしており、他府県と価格体系が異なっており、「徳用上米」「標準価格米」は0円で「他のうるち米」に集計されている結果、他9県と同列には比較できない。

ついで仙台の10.5%から11.5%、新潟の12.3%から11.2%の範囲で低位をしめている。この2地域は主要米穀生産地帯であり消費者も安価に購入しているものと思われる。全平均値は12.2%である。

F検定の結果表5のように地域、年度ともに高度の有意差が認められた。

3) 地域別、年度別、副食が食料費にしめる割合

図5に示したように、最高は那覇の49年の60.3%で最低は札幌の48.9%とその差は、約11%の開きがみられる。48年から49年にかけて各地域とも上昇しているが、49年から50年にかけて、その逆の下降を示している。53年は那覇、大阪を除き他8地域は49.3から50.3%間の1%に集中し地域差はみられないが、やや54年には拡大傾向を示している。

全平均値は52.2%である。

F検定の結果表5のように地域、年度ともに高度の有意差が認められた。

4) 地域別、年度別菓子が食料費にしめる割合

図6に示したように、最高は仙台、最低は高知で地域別の平均値は仙台8.3%、高知5.2%である。

全平均は6.6%で、平均値をさかいに上部と下部の2層にははっきりと分れている。菓子を好む地域と好まない地域が明瞭である。

F検定の結果表6のように、地域、年度ともに高

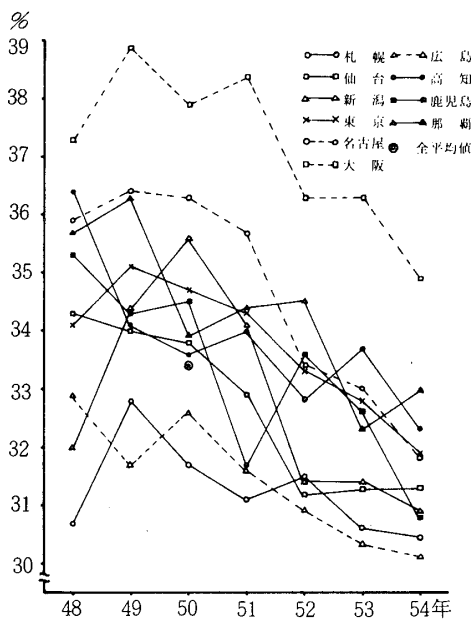


図3 地域別、年度別、食料費が消費支出にしめる割合

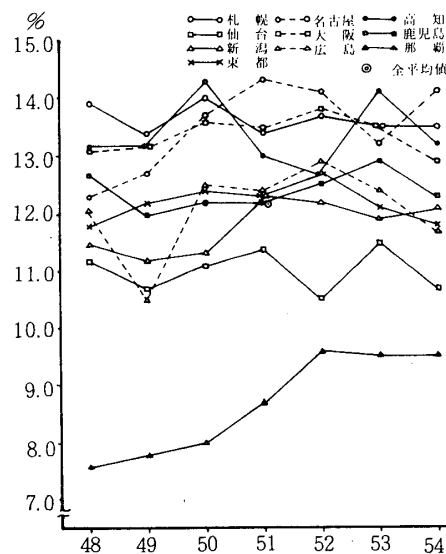


図4 地域別、年度別、主食が食料費にしめる割合

度の有意差が認められた。

表4 主 食

要因	S.S.	d.f.	m.s.	Fo	F (0.05)	F (0.01)
地域	143.90	9	15.99	61.50**	2.04	2.72
年度	5.03	6	0.84	3.23**	2.25	3.12
誤差	13.92	54	0.26			
計	162.85	69				

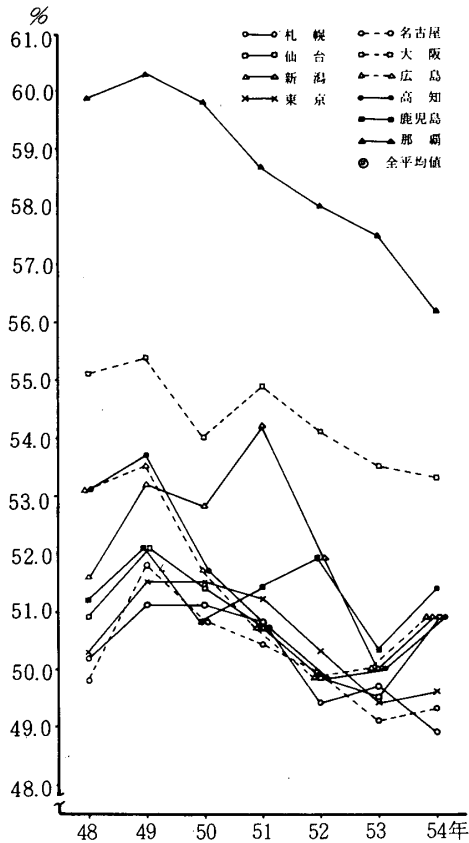


図5 地域別、年度別、副食が食料費にしめる割合

表5 副 食

要因	S.S.	d.f.	m.s.	Fo	F (0.05)	F (0.01)
地域	433.11	9	48.12	98.20**	2.04	2.72
年度	45.46	6	7.58	15.46**	2.25	3.12
誤差	26.55	54	0.49			
計	505.12	69				

表6 菓 子

要因	S.S.	d.f.	m.s.	Fo	F (0.05)	F (0.01)
地域	53.07	9	5.90	98.33**	2.04	2.72
年度	1.74	6	0.29	4.83**	2.25	3.12
誤差	3.58	54	0.06			
計	58.39	69				

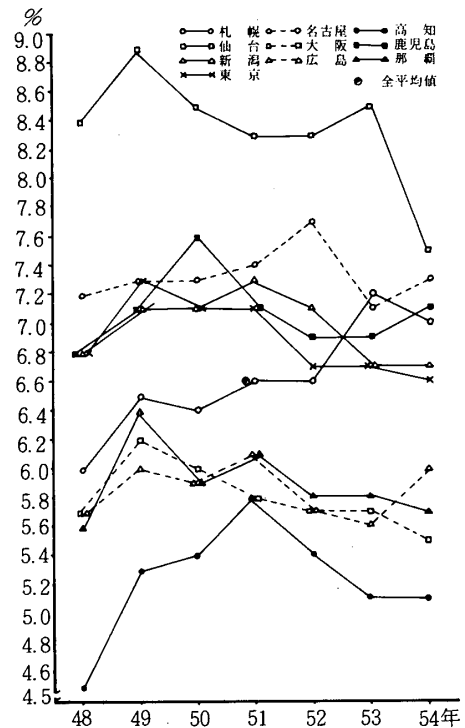


図6 地域別、年度別、菓子が食料費にしめる割合

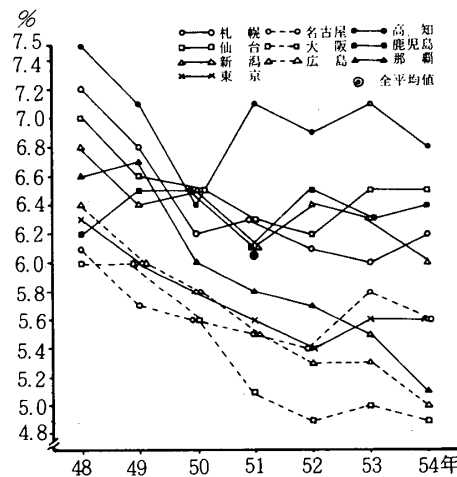


図7 地域別、年度別、果物が食料費にしめる割合

表7 果 物

要因	S.S.	d.f.	m.s.	F <sub>0</sub>	F (0.05)	F (0.01)
地域	16.11	9	1.79	29.83**	2.04	2.72
年度	5.22	6	0.87	14.50**	2.25	3.12
誤差	3.32	54	0.06			
計	24.65	69				

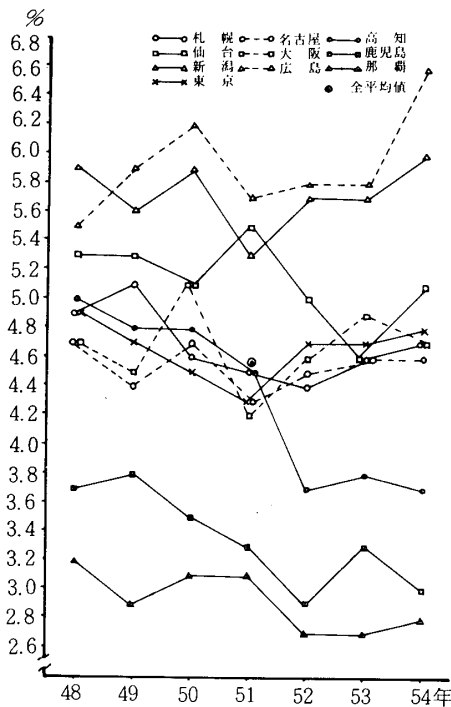


図8 地域別、年度別、酒類が食料費にしめる割合

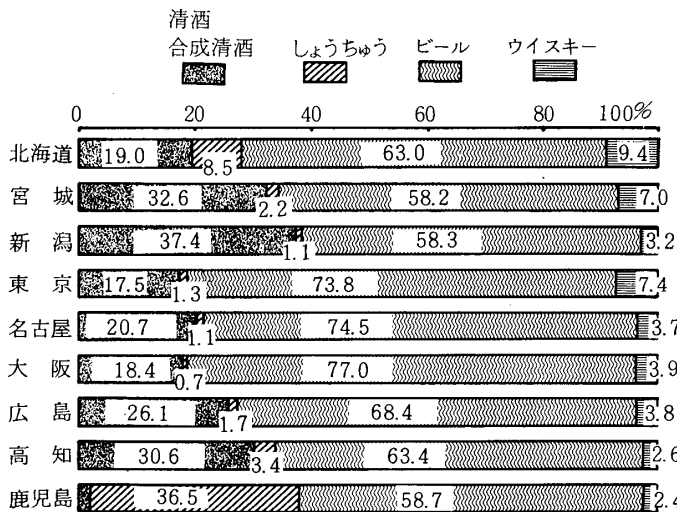


図9 地域別、酒類販売(消費)数量の割合(昭和53年)

5) 地域別、年度別果物が食料費にしめる割合

図7に示したように、48年から49年にかけて、鹿児島と那覇を除き、下降をたどり、50年には新潟の0.1%の上昇のみで他9地域は下降して、50年は最も地域差が狭く約5.6~6.5%の範囲内である。那覇は49年をピークに下降の一途をたどっている。全平均値は6.0%である。

F検定の結果表7のように地域、年度ともに高度の有意差が認められた。

6) 地域別、年度別酒類が食料費にしめる割合

図8に示したように、最高は広島の平均5.9%新潟の5.7%最低は那覇の2.9%、鹿児島3.3%である。

沖縄、鹿児島は焼酎、泡盛などが特産品であり消費量が高いことが図9にもみられる。(図9は北海道一札幌、宮城一仙台と調査地域の違い、また沖縄一那覇はデータがない)鹿児島は他県に比べ、焼酎の消費量が36.5%と他8地域の平均2.07%に比べ高率をしめていることなどからも図8の結果と同様である。

全平均値は4.5%である。

F検定の結果表8のように地域に高度の有意差、年代に有意の差が認められた。

7) 地域別、年度別飲料が食料費にしめる割合

図10に示したように、那覇が食料費にしめる割合が各年とも最も高い。49年は那覇の6.1%から高知の3.3%とその幅も広いが、54年は最低が4.0%から最高5.2%とその幅も49年に比べ約1/2の範囲にしめている。

全平均値は4.5%である。

F検定の結果表9のように、地域、年度ともに高度の有意差が認められた。

表8 酒 類

要因	S.S.	d.f.	m.s.	Fo	F (0.05)	F (0.01)
地域	54.03	9	6.00	75.00**	2.04	2.72
年度	1.38	6	0.23	2.78**	2.25	3.12
誤差	4.60	54	0.08			
計	60.01	69				

表9 飲 料

要因	S.S.	d.f.	m.s.	Fo	F (0.05)	F (0.01)
地域	17.91	9	1.99	28.43**	2.04	2.72
年度	1.42	6	0.24	3.43**	2.25	3.12
誤差	3.81	54	0.07			
計	23.14	69				

表10 外 食

要因	S.S.	d.f.	m.s.	Fo	F (0.05)	F (0.01)
地域	78.66	6	13.11	24.28**	2.04	2.72
年度	58.00	9	6.44	11.93**	2.25	3.12
誤差	29.12	54	0.54			
計	165.78	69				

8) 地域別、年度別外食費が食料費にしめる割合

図11に示したように、48年に比べ49年はどの地域もマイナスを示した。49年の那覇は最低の10%で54,000円であるが、54年は15.5%で106,000円と5年で支出額は約2倍の伸びをした。

49年以降上昇しているのは、東京、大阪、広島である。

支出額は対前年度より減じたのは、52年に鹿児島約3,000円、53年は札幌約6,800円、仙台約10,300円、那覇約13,000円、54年度は新潟約3,000円、名古屋約5,000円、鹿児島約2,000円で52年度までは上昇傾向であったが52年以降ややかげりがみられる。

全平均値は13.7%である。

F検定の結果表10のように、地域、年度ともに高度の有意差がみられた。

IIの結果をまとめると、

図4から図10の中の●印は全平均値を示したものである。表11は上記の●印の平均値を中心に、全て各年とも上部を通った場合「上」下部を通った場合「下」全平均値を上下した場合を「中」として示したものである。

1) 地域別には新潟は費目の配分で下がなく、安定した食生活をしていると考える。ついで仙台、東京、鹿児島である。

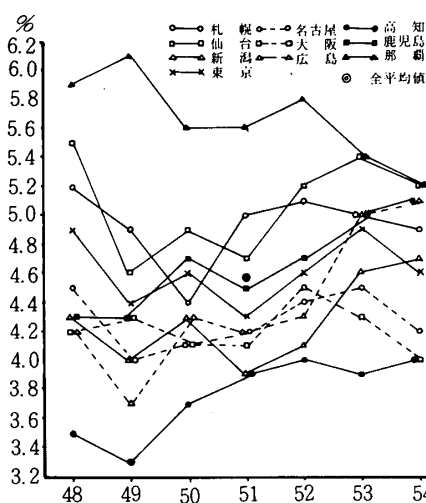


図10 地域別、年度別、飲料が食料費にしめる割合

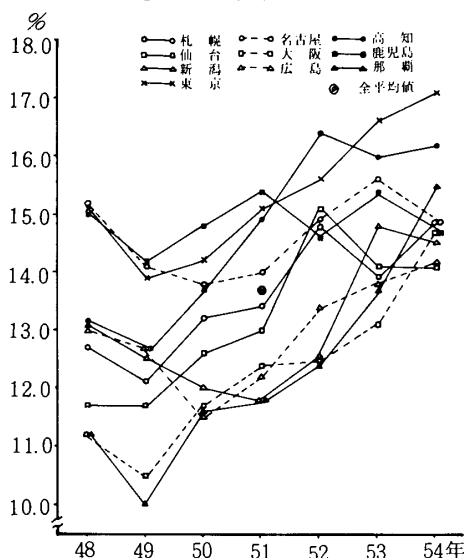


図11 地域別、年度別、外食費が食料費にしめる割合

表11 費目別. 区分別. 地域別. 評価

地域 費目	上										中										下									
	札幌	仙台	新潟	東京	名古屋	大阪	広島	高知	鹿児島	那覇	札幌	仙台	新潟	東京	名古屋	大阪	広島	高知	鹿児島	那覇	札幌	仙台	新潟	東京	名古屋	大阪	広島	高知	鹿児島	那覇
主食	○					○	○					○	○	○		○		○											○	
副食						○			○			○				○	○				○	○		○	○				○	
菓子		○	○	○	○				○		○														○	○	○		○	
果物			○					○	○		○	○				○							○	○						
酒類		○	○				○				○			○	○	○												○	○	
飲料		○							○		○		○	○					○					○	○			○		
外食				○	○				○		○	○	○			○	○	○		○										

- 2) 費目についてみると、外食は全地域ともに下はなく、中以上で他費目と比べ、全く違う傾向を示している。
- 3) 主食では、那覇は米価の体系の違い、仙台、新潟は生産地であることなどから平均より低位であることはうなづける。
- 4) 菓子および酒類は大阪より西に多く好まれる傾向がある。

### 要 約

以上全体をまとめると

1. 消費支出額からみた場合、全国、地域ともに伸び率は、費目によって鈍化する年度に差がみられる。
2. 大阪は主食と副食に大きく支出していることが、エンゲル係数を高めているものと推察できる。
3. 酒類は鹿児島島の焼酎、沖縄の泡盛が特産品であり、消費量も多く安価なために低率である。
4. 米穀の主要生産地である仙台、新潟は主食のしめる割合は低率である。
5. 食料費の費目別にF検定の結果、地域と年度に高度に有意の差が認められた。

近年食生活の形態の変化は外食費の伸び率をみても明白のように、外部への依存が高まってきており、食生活の意識の変化、多様化志向、主婦の家事負担の軽減、主婦の社会参加、職場進出さらに食生活のレジャー的性格等が問題点として考えられる。今後さらに食料品の個別品目を地域と年度でとらえて、課題としたい。

### 参 考 文 献

- 1) 加藤恵子 名古屋女子大学紀要26, 49~57 (1980)
- 2) 今村幸雄他 家政学研究27, 1 61~69